

『荒涼館』に輝く月
— エスター・サマソンの結末 —

key words: 結末場面、太陽と月、美貌と美德、エスターの成長物語、
ジェンダー・イデオロギー

長谷川 雅世

『荒涼館』(*Bleak House* 1852-53) は小説当時の法制度の欠陥や支配者階級の無責任、公衆衛生改革などの時事的な問題を扱った社会批判の小説である。それと同時に、この小説は、主人公であり語り手の1人でもあるエスター(Esther Summerson) の成長物語でもある。それゆえ従来の批評には、この小説をエスターという私生児として生まれた女性による出自や自己の探求の物語として読み解いているものが多い。しかし、こうした『荒涼館』批評の潮流においても、エスターの成長や変化を理解するためには重要であるのに、これまで十分に考察されてこなかった問題がある。それは、小説の結末でもあるエスターの物語の結末における場面設定についてである。

エスターは小説中で、彼女のいるところにはいつも“sunshine and summer air” (486) があると語られている。そのうえエスターは、「サマソン(Summerson)」という夏の太陽(summer sun) を想起させる名前を持っている。また、彼女は、「あなたを中心とした小さな秩序立ったシステムが完璧に動く」(603) ことに専心し、「素晴らしい管理能力」(676) を持つと語られている。そして、その彼女と彼女の統治する家庭が、この小説が描き出している腐敗したイギリス社会を改善させるものとして提示されている。それに対して、小説の冒頭では、狂ったシステムである司法や行政のために混沌に陥り、「太陽の死(the death of the sun)」(13) を嘆いているイギリスの姿が象徴的に描かれている。

この冒頭場面とエスターに与えられている役割とを併せて考えれば、エスターの幸せな結婚生活が語られる結末場面は、彼女の名前通りの、冒頭場面とは対照的な、太陽が燦燦と輝く夏の日であるのが相応しいと思われる。だが実際は、月が美しく輝く夜である。ディケンズが自然描写を象徴的に用いる作家で

あることを考慮すれば、この場面設定には何らかの意味があると考えられる。

そこで本論文では、この小説の結末、すなわちエスターの物語の結末が月夜である理由を探りながら、「不可解な」(Newsom 2000: 118)と称される小説の最後の言葉「たとえもしも (- even supposing -)」に込められたエスターの思いを考察する。また、そうすることで、これまで意見の分かれてきたエスターの成長物語の結末についても解釈を提示する。

1

『荒涼館』の最終章である「エスターの物語の終わり」では、まず、ウッドコート (Allan Woodcourt) と結婚してから 7 年後、つまり現在のエスターと他の主要な登場人物たちの生活について語られる。そのあと、エスターとウッドコートの会話の場面へと物語は進む。その会話のなかで、エスターは、病気で醜くなる以前の自分の顔について思いを巡らせながら「たとえ昔どおりの顔だったとしても、今以上にあなたに愛してもらえなかったでしょう」(989)と考えていた、とウッドコートに話す。それに対して、ウッドコートがエスターに鏡を見ていないのかと尋ね、「前よりもきれいになっていることに気づいていないのかい」(989)と言う。このあと、次のようなエスターの語りがある。

I did not know that; I am not certain that I know it now. But I know that my dearest pets [children] are very pretty, and that my darling [Ada] is very beautiful, and that my husband is very handsome, and that my guardian has the brightest and most benevolent face that ever was seen; and that they can very well do without much beauty in me - even supposing -. (989)

このようにこの小説は、「たとえもしも」というエスターの途中で途切れている独白で終わっている。果たして、ここでエスターが語ろうとしたことは何だったのだろうか。それを知るには、まず、彼女の語りの特徴を理解しなければならない。

語り手エスターは、他者に対する鋭い判断力を持ちながらも、自分の意見を主張することを躊躇したり言い訳したりする。また、自分に関する、特に自分

の恋愛に関することを語るときには、彼女はますます言葉を濁し、口をつぐむ。従来の批評家には、そのようなエステーの「慎ましさ (modesty)」や「内気さ (coyness)」に苛立ち、それを偽善的だと感じる者は多かった。しかし今日では、エステーの語りは、私生児として生まれ、子ども時代に精神的障害を負った彼女の心理が巧みに表現されていると肯定的に評価されている。

このようなエステーの語りには、結末での彼女の言葉との関連で注目すべき2つの特徴がある。まず、彼女は自分の美点を否定すること。例えば、エステーは彼女の語りを始めてすぐに、「私は自分が利口でないことを知っている」し、「そのことをいつも知っていた」(27)と語る。或いは、「私は決して理解が早いわけではありません」(28)と述べる。次に、彼女は自分の美点を他人の美点として語る。グリーンリーフ (Greenleaf) という寄宿学校での出来事を語っているとき、エステーは「寄宿学校の生徒たちは私をととても優しい人だと言ってくれました。でも、彼女たちこそが優しかったのです！」(39)と言う。また、エイダ (Ada) との初対面の場面では、「彼女が私のことを信頼し好いてくれることが分かって本当に嬉しかった」と述べたあとに、「それは彼女がととても良い人だからです」と話している(44)。このように、語り手エステーには、自分の美点を否定したり、自分の美点を他人の美点へと変換しようとする傾向がある。この傾向を「エステーのあまりにも意識的な無意識ぶり (the too conscious unconsciousness of Esther)」(Forster 282)とまでは言わないが、結果的には、エステーが彼女自身の美德を読者に伝える手段となっている。だとすれば、彼女が他人の美しさを強調し、自分の美しさを否定したあとに言おうとした小説の最後の言葉も、彼女の美点に関連しているのではないだろうか。では、その美点とは具体的に何なのだろうか。このことを知る手掛かりは、エステーがウッドコートと会話をしていたときの場面設定にある。

結末でエステーの顔へと話題が向かうのは、「こんなところで何をしているんだい」と問うウッドコートに対して、エステーが「月がととても美しく輝いていて、あまりにすばらしい夜だから、ここに座りながら考えごとをしていたの」(989)と返答したのが契機である。さらにこのあと、エステーは、昔の自分の顔について考えていたのだと言う。ここで注目すべきなのは、エステーが自分の容貌について思いを巡らせていたのが、美しく輝く月を眺めながらであるこ

とだ。

エステルは物語の途中で、浮浪児ジョー (Jo) から伝染した病に罹り、顔が「醜く (spoilt)」になってしまう。エステルが感染した病気の名前は、小説中で明記されていない。しかし、シュワルツバッハ (Schwarzbach) が論じているように、それは「天然痘」だと推測できる (21-27)。だとすれば、病後に醜くなったエステルの顔は、痘痕でこぼこなはずである。彼女の顔は、小説中で「火山の火で荒らされた (blasted by volcanic fires)」(708) と語られる月の表面のようなのだ。一方、結末でエステルはその月を見て自分の顔のことを考え、そのうえで、その月が「とても美しく輝いている (shining so brightly)」と言っている。美しく輝くこの月は、「外面は醜いが、私は美しく輝いている」、別言すれば、「私には内面的な輝きがある」というエステルの心の内を表象していると思われる。このように考えれば、小説の前半での「ごつごつした姿 (its rugged character) には似つかわしくないような柔らかな長い影 (a softer train of shadow) を投げ掛けている」(115) というアビー教会についての描写のあとに突然挿入されている、「でも、そのようにいかつい表面 (rough outsides) から、(私はこのことが分かるようになったと思います) 穏やかで優しい力 (serene and gentle influences) がしばしば発せられるのです」(115) というエステルの不可解な言葉も説明できる。ここでもエステルは、物語の最後で語ろうとしたのと同じく、醜い外見をしているが美しい内面の力を持っている自分自身について言及しているのだ。

実際に、エステルは結末で自分たちの容貌について述べる直前に、ウッドコートとの現在の生活について話し、そのなかで自分の美德について語っている。彼女は、裕福ではないが満ち足りた生活を送っていて、ウッドコートと共に外を歩くときはいつも「人々が彼に感謝するのを聞き」、誰の家に行っても「彼を褒めたたえる声を耳にし、感謝の眼差しに出会う」(988) と言う。続けて、エステルは次のように述べる。

The people even praise Me as the doctor's [Woodcourt's] wife. The people even like Me as I go about, and make so much of me that I am quite abashed. I owe it all to him, my love, my pride! They like me for his sake, as I do

everything I do in life for his sake. (988-89)

ここでエスターは、彼女が人々に好かれ称賛されるのは夫のおかげだと言っている。その一方で、彼女は“Me”という大文字表記を用いて自分自身の存在を強調している。彼女の語りの特徴を考慮すれば、これは控えめな語り手エスターにとっての最大限の自己主張だと言える。この語りのなかで彼女は、自分自身も勤勉さや優しさという美德の持ち主であり、人々に好かれ喜ばれる人物であることを伝えようとしているのだ。

2

結末でのエスターは、自分には外見の美しさはなくても美德という内面の美しさがあると思っている。しかし、ここで留意しなくてはならないことがある。それは、エスターにとって美貌は字義通り以上の意味を持っていることだ。

子ども時代のエスターは、自分が私生児であることをはっきりと知っていたわけではない。しかし、「おまえの母親はおまえの恥でおまえは母親の恥」であり、そのような「影」と共に生まれたエスターには他の子どもたち以上の「罪と罰」があるのだ、と養母に言われていた(30-31)。エスターは、彼女が愛していた「美しい顔色とバラ色の唇」(27)をした人形のドリー(Dolly)とは違って、「私はこれまで誰の心にも喜びを与えたことはなく」、自分は生まれながらにして「罪」を負っているのだと思っていた(31)。彼女は、他の子どもたちとは違って、自分には生まれながらの「影」や「罪」があるのだと強く感じさせられながら、育てられてきたのである。

そのようなエスターは、彼女が「美しく若い娘」(45)と評するエイダへの態度に如実に表れているように、病気で顔が醜くなる以前から、美しさに対して過剰に反応していた。それは、彼女にとって外見の「美しさ」が「生まれの美しさ(=汚れのなさ)」を含意していたからだ。アクストン(Axton)は、荒涼館で与えられたエスターのあだ名の“Dame Durden”や“Dame Trot”は、童謡に登場する孤児の世話をする老婆や魔女の名前であり、特に“Mrs. (Mother) Shipton”は悪しき家系の醜い老婆であるが、それらは“[Esther’s] neurotic fear that her illegitimate birth is a disfigurement which incapacitates her for love”を体現して

いると指摘している(158-63)。エスターのこれらのあだ名も、外見の美しさに象徴的な意味があることを暗示している。エスターにとって、顔の美しさ出自と結びつくことは、物語が進むにつれてより明らかになる。エスターは、病気のチャーリー(Charley)を看病しているうちに、自らも病に侵され、一命はとりとめるものの顔が醜く変わってしまう。そのあとエスターは田舎へ静養に行き、そこで自分がデッドロック夫人(Lady Dedlock)の生んだ私生児であることを聞かされる。このときエスターは、自分の「影」や「罪」の正体をはっきりと知った。それゆえこれ以降、「私の病気の消えぬ痕跡と、私の生まれの事情」(693)や「私の顔が醜いことと、私が恥辱を背負って生まれてきたこと」(692)とあるように、彼女のなかで、顔の醜さと生まれの醜さがはっきりと並列される。

病気になる以前から、彼女の心には自分は醜いのではないのかという不安があった。その不安が病気を通して彼女の顔に具現化した。そしてその直後に、自分を醜いと感じていた原因の真相が明らかになったのだ。このように、エスターにとって顔の美しさは生まれの美しさと密接に結びついている。だとすれば、結末で容貌の醜さを認める一方で自分の内的な輝きをも認めているとき、彼女は、私生児という生まれの醜さを持っていても自分は美德という輝きを育んできたと考えていると言える。

このように、物語の最後で、エスターは自分自身を肯定的に捉えている。ところが、以前の彼女はそうではなかった。エスターは養母に、影と共に生まれた彼女には、「従順と克己と勤勉(Submission, self-denial, diligent work)」(30)が必要だと言われてきた。それを受けてエスターは、「大きくなるにつれて、勤勉で不平を言わない心の優しい人(industrious, contented and kind-hearted)になり、人のために尽くし、そしてできることなら人からの愛情を得られるように努力しよう」(31)と思い続けてきた。エスターの決意は、養母の言葉の「僅かではあるが意義ある変形」(Zwardling 430)である。養母の言葉は自己否定や服従の強制であるのに対し、エスターの言葉は自己を向上させ、価値ある人間になろうとする決意である。しかし、実際にエスターが実行していたのは、むしろ養母の言葉だった。エスターは、何事につけてもそれは「義務」なのだと自分自身に言い聞かせたり、自分の感情や自我を抑圧していた。ジャーナダイス

氏 (John Jarndyce) は、彼への恩義のためにウッドコートへの恋愛感情を押し殺そうとしているエステルについて、“[Esther] will sacrifice her love to a sense of duty and affection, and will sacrifice it so completely, so entirely, so religiously” (965) と述べている。この言葉に端的に表れているように、エステルの献身や利他主義は文字通りの自己犠牲であり、自己抑圧や自己否定の結果である。

だから、彼女は常に喪失感を感じていた。例えば、物語の前半で、うたた寝をしていたエステルは夢を見る。その夢のなかで、最初は、彼女にもたれ掛かって眠っているキャディ (Caddy) が「誰だか分からなく (lose the identity)」なり、次に、それが様々な人や物に変化し、「最後にはそれが誰でもなくなり、そして私が誰でもなくなった (Lastly, it was no one, and I was no one)」(63)。さらに、伝染病に感染したときに見た夢のなかでは、エステルは、同時に、「子どもにも、少女にも、小さなおばさんにも」なり、「それぞれの立場に応じた心配事や困難」だけでなく「それらの立場を調和させることを際限なく試みること」にも苦しめられる (555)。これらの夢からは、自己喪失や自己分裂を読み取ることができる。ディケンズはしばしば夢、特に、『リトル・ドリット』(*Little Dorrit* 1855-57) で債務者監獄に収監されていたときにアーサー (Arthur Clennam) が見た夢や『大いなる遺産』(*Great Expectations* 1860-61) でマグウィッチ (Magwitch) の死後にピップ (Pip) が見た夢に見られるように、病床での夢の描写を通して、その登場人物の心の奥底を描き出す。だからこの場合は、他人に尽くすために自我を抑圧し続けてきた結果として自己の喪失を感じ、自己分裂を起こしているエステルの心の内が描かれていると考えられる。

3

エステルは、「影」や「罪」と共に生まれてきた自分自身を卑下し、否定してきた。しかし、本論文で考察してきたように、愛するウッドコートとの幸せな生活を手にした結末でのエステルは、自己を肯定的に捉えている。とすれば、「たとえもしも」という言葉のあとで、彼女は自らの価値を主張しようとしていると考えられる。確かに、エステル自身が説明しているように、養母の教育によって「生まれつき以上に臆病で内気になった」(28) 彼女は、最後まで自分の美德を率直には主張しない。しかし、結末場面の美しく輝く月が、夜の闇の

ような生まれの暗さを持っていることを認めると同時にその闇に負けぬほどの輝きも持っていると感じているエステーの心情を伝えている。

従来 of 批評では、結末でのエステーについて様々な意見が提示されてきた。例えば、ミッチー (Michie) は、母親に似た顔と母親の両方を失うことでエステーは彼女自身になったと述べている (199-209)。ペルタソン (Peltason) の場合は、自己否定的だったエステーが自己を肯定するようになる姿を読み解き、結末でエステーは自分の美しさや自分が愛されるだけの価値があるということを率直に主張できる状態に近づけたと指摘している (671-90)。それに対してフランク (Frank) は、エステーは最終的にアイデンティティを得たように見えるが、実際には、彼女とウッドコートたちが作り出したある 1 つの彼女のイメージに達したに過ぎないと述べている (111)。ハーシュ (Hirsch) においては、親の権威に抵抗せず従順であり続けることでエステーはささやかな幸せを手にしたが、彼女の劣等感と愛情を受けるに足るのかという不安は払拭されてはいないと解釈している (136-40)。このように、エステーは結末で成長と呼べる変化を果たし得ているのかどうかについて、様々な意見が出されてきた。しかし、決定的と呼べる解釈は提示されてこなかった。だが、結末場面があえて月が美しく輝く夜に設定されている理由を考えれば、エステーは最終的に自己否定から自己肯定の状態へと向上したと結論づけられる。

『荒涼館』では、家庭を疎かにしてアフリカへの慈善事業という社会活動に躍起になるジェリビー夫人 (Mrs Jellyby) や、「家庭の使命などという卑しい使命こそ最も我慢できないもの」で、「女性の使命は主として家庭という狭い領域にあるという考えは女性の暴君である男性側からのひどい中傷だ」(482) と訴える彼女の仲間たちが皮肉られ、批判的に描かれている。その一方で、献身的で利他的で従順な女性であり、有能な主婦でもあるエステーは、中流階級が理想的な女性像としていた家庭の天使を想起させ、その彼女が美德の体現者として描かれている。それゆえ、この小説は「分離された領域 (separate spheres)」を信奉している反フェミニズム的な小説だと言われ、エステーは“the creature of a male chauvinism”だと見なされることが多かった。しかし、今日ではそのような見方に異が唱えられている (Sadrin 248-58, Newsom 1991: 54-81)。そして、

これまで論述してきたように、結末でのエスターは自己否定から脱し得ていると解釈できることから、この小説を単純に反フェミニズム的やセクシズム的とは解することができない。というのも、小説の結末で自己を肯定的に捉え、己の価値を認めて主張しようとするようになったエスターを描くとき、ディケンズは、それまでのエスターが行ってきたような完全な自己犠牲や自己抑圧、服従の上に成り立つ利他主義や献身を否定しているからである。つまり、当時の中流階級のイデオロギーが女性に強いていた没自我や服従から脱するエスターを描くことで、ディケンズはそれらに否定的な態度を示している。この点でディケンズは、当時の中流階級のジェンダー・イデオロギーを越えていると言える。

Works Cited

- Axton, William. "Esther's Nicknames: A Study in Relevance." *Dickensian* 62 (1966): 158-63.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. Ed. Nicola Bradbury, Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin Books, 1996.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*, Household Edition. 1872-74; London: Chapman & Hall, n. d.
- Frank, Lawrence. "'Through a Glass Darkly': Esther Summerson and *Bleak House*." *Dickens Studies Annual* 4 (1975): 91-112.
- Hirsch, Gordon. "The Mysteries in *Bleak House*: A Psychoanalytic Study." *Dickens Studies Annual* 4 (1975): 132-52.
- Michie, Helena. "'Who is this in Pain?': Scarring, Disfigurement, and Female Identity in *Bleak House* and *Our Mutual Friend*." *Novel: A Forum on Fiction* 22 (1989): 199-212.
- Newsom, Robert. *Charles Dickens Revisited*. New York: Twayne Publishers, 2000.
- . "*Villette* and *Bleak House*: Authorizing Women." *Nineteenth-Century Literature* 46 (1991): 54-81.
- Peltason, Timothy. "Esther's Will." *ELH* 59 (1992): 671-91.

Sadrin, Anny. "Charlotte Dickens: The Female Narrator of *Bleak House*." *Charles Dickens Critical Assessments*, vol. □. Ed. Michael Hollington. 1992; Mountfield: Helm Information, 1995. 248-59.

Schwarzbach, F. S. "The Fever of *Bleak House*." *English Language Notes* 20 (1983) : 21-27.

Zwerdling, Alex. "Esther Summerson Rehabilitated." *PMLA* 88 (1973) : 429-39.

『中国四国英文学研究』第2号

(日本英文学会中部支部, 2005) pp. 31-41.

The Brightly Shining Moon in *Bleak House*:
The Ending of Esther Summerson's Narrative
HASEGAWA, Masayo

The opening paragraphs of *Bleak House* describe England mourning “the death of the sun” because of its chaotic and corrupted condition. On the other hand, the heroine Esther bears the name “Summerson” associated with “the summer sun,” and she is representative of Dickens’s hope for improvements in English society. Given these facts, a sunny summer day seems an appropriate setting for the final scene depicting Esther’s happy married life, but as it is, the setting is a bright moonlit night. Dickens chose to finish the novel, the story of Esther’s quest for origins and selfhood, with a brightly shining moon. This is because Dickens tried to symbolically delineate Esther’s psychological state through natural phenomena.

In the middle of the novel, Esther contracts small pox and her face comes to resemble the surface of the moon because of pockmarks. Esther, as an illegitimate child, has lost beauty which has a metaphorical connection with purity of birth. Esther, who has the disfigurements of face and birth, lacks outward beauty, but inwardly she possesses kindness, devotedness, and ability to nurture others. Esther, although never frankly articulated, believes that even if having no beautiful externalities, she shines brightly by her own inward force, and such her muted feelings are symbolized in the bright moon in the final scene. While Esther has been in a state of self-depreciation throughout most of the novel, the Esther in the final scene is confident in her own worthiness.

Bleak House has been regarded as an anti-feministic novel espousing the contemporary gender ideology wherein women’s self-effacement and self-denial are applaudingly idealized. However, through describing the heroine’s progress from self-denial to self-esteem, Dickens is partly objecting to the ideology, and taking himself beyond its limits.